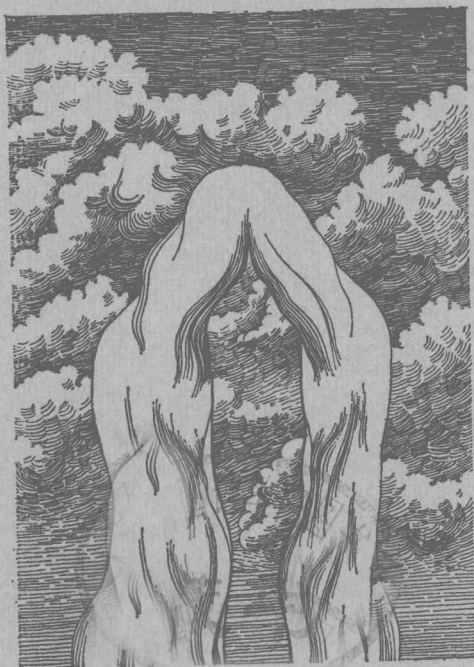


豊田清史著

広島の遺書

広島の遺書 豊田清史著



蒼洋社

広島の遺書

定価一八〇〇円

昭和六二年七月一〇日 印刷
昭和六二年七月一五日 発行

著者

豊田清史
とよた きよし

発行者

相良伊津子

発行所

株式会社 蒼洋社

101

東京都千代田区猿樂町二一八―一三
電話(〇三)二九五―八七七五
振替口座 東京三一―三八六四八

発売元

株式会社 桜楓社

101

東京都千代田区猿樂町二一八―一三
電話(〇三)二九五―八七七五(代)

シナノ印刷株式会社／大口製本印刷株式会社

検印省略

ISBN 4-915628-00-0 C 0095

広島 の 遺書

目 次

第一部 広島に生きて

被爆記 9

死 夜 44

寂寥日記 61

わが炎のノート 72

第二部 忘れられない人々

原民喜を偲ぶ―死の蟋蟀― 91

峠三吉を憶う―ヒューマニズムに二つはない― 103

大田洋子回想―みずから酷薄の琴に果つ― 118

広島の小端康成―真夜中の聞き耳― 126

正田篠枝、人と作品―怨念と「大きな骨」の歌― 141

吉野秀雄大人の気魄―慰霊碑の碑文は甘すぎる―

158

梶山季之を思う―やさしい無頼作家―

174

第三部 現実と私のねがい

広島の七不思議

191

私の原爆文獻収集

218

羽ばたく千羽鶴

239

原爆の風化と修飾

254

広島の平和実践家たち

268

人間悪の摘発を

292

あとに

広島
の
遺書

第一部 広島に生きて

被爆記

一

ムッと胸がえずくようなくさい熱気が、車窓に漂ってきた。

列車は息苦しく矢賀のトンネルを抜けて、ダ、ダ、ダと急にスピードを落として、市街の手前でとまってしまった。

と、一人の男がいきなりぶつかるように、目の前の車窓に飛びついてきた。脅えきった眼。ガバツと鎧戸をへし折るようにつかみ、自分の体を強引に乗り入れようとする。

——一人ではない。どれもこれも深傷を負った半裸、それらがどつとぶつかり、猛って車窓やデツキに殺到してきた。

私は焦った。二十四歳の教員（広島師範付属緑井国民学校勤務）の私は、やおら反抗心にとがってこれらを押しのけ、いち早く車外に出ようとした。

咄嗟に突っこむように入りこんできた男が、出合いがしらにいきなり私の右手をとって、がむし

やらに噛みついてきた。(何しやる!) 私は手を振り切ろうとして、そいつを見た。おとなではない、まだ少年だ! ひどく眼をとがらせて、私が手をふりきったあとも、何かうわごとを繰りかえして、車内へ押しこめられていった。

(狂っている!) 私は今一度そいつの正体を見ようとしたが、乗客にはばまれて、ちぎれるように線路の人混みに突き出された。

人のうごめきは線路づたいに溢れきって、おびただしい浮浪者^{ふろうしや}さながらの群れ、踏み荒らされた諸^い畑の上にも、傷を受けた白衣兵がどれもこれも首を突き出して、阿呆^{あほう}さながらにうずくまっている。——じりじり灼けつける真夏の天日、病衣を膚^{はだ}脱ぎにした三人の兵が並んで眼をとじている。ガラスの破片を無数に背にうけて、その白い膚^{はだ}いちめんに黒い血がにじんでいる。軟膏^{かんこう}を溶かしたような背^せ膚^{はだ}、どれも身動きができはしないのだ。

(ひどいやられたかた!) 私は心のだじろぎを鎮めてそこを過ぎた。何よりも市内の第二部隊にいる父を見つけねばならぬ。私はいらだつように市街に向って歩いていった。

昨日の朝、市街に爆弾が落とされたとき、私は広島駅東側、鉄道線路に沿った松原町の家並みの小路(被爆者健康手帳には被爆場所マツバラチョウ、爆心地から一・七キロメートルとある)を尾^お長町^{ながまち}の県学務課へ向っていた。朝、県の松浦学務課長のカバン持ちをして、三次国民学校の少年団訓練を視察に行く為だったが、課長が来ず、仕方なく次の列車までの待ち合い時間を、様子を確かめようと尾長町看護学校にある、県庁から疎開している学務課へ小急ぎに向っていたのだ。

パッと眼をかすめた異様な光、ついで、ド、ドーンと打ちのめしざまに全身にかぶさってきた松葉をくすべたような白い煙、怖し気がきた私はとにかく逃げ走った。めらめらと燃える火焰の路上を、手負い、焼かれた獣のように逃げて石塀にぶつかった。それは寺の山門（荒神町二丁目浄光寺現・あそか幼稚園）で、そこで私は初めて頭を割られた血まみれの女を見て、思わず喚（い）が、その叫びは声とならず、しばらく立ちすくんだ。喰らいつくように紅い火の唇（くち）が二階屋の軒で燃え盛る。私はそこを抜けて、群衆に続いてまた走った。矢賀駅のあたりで、柘榴（ざくろ）のように真っ赤に裂けた人の頭を見かけたのが脳裡（のうり）にあるだけで、戸坂峠（とさか）を越すまで、自分の行動をさだかに覚えていない。足首をえぐられた傷さえも。

（ひどい爆弾だ！）私の脳裡にはメスがひらめくように、父の兵隊姿や、従兄（いとこ）のTの姿などがうかび、急に不安がつうつてきた。Tは無事にしても父はきっとやられている。敵が師団や兵営を狙わぬということはない。父は三日前に防衛（ぼうえい）召集をうけて、市街の中心である西部第二部隊にはいつているのだ。

（すぐに引き返さねば……）こう思いながらも不安が増す。黒煙が今は猛烈な火焰のくすぶりをまじえて、上空にひろがってゆく。

燃えしきる火焰は、炎々高く気流に乗って北に流れ、八キロ奥の可部町（かべまち）の空までも濁してゆく。あたりの街道筋の民家も、爆風を受けてか、窓ガラスがあっ気なく吹っ飛んでいる。

（一体、これはどうしたことか？）

「何発投げられたのか？」

「なに、こりや焼夷弾が近くに落ちとる」

トラックの荷台の警防団長は、かたわらの団員の言い分を鋭く封じこんで叫んだ。

救援隊を満載したトラック、ダットサンが何台も太田川筋を埃を巻きあげて市街へ疾走して行った。
[負傷者救護所]と貼り紙の出された村の公会堂（実は後になって気づいたのだが戸坂国民学校であった）にたどりついて、私はそこにうずくまった。時刻はすでに午後で、空は陰悪に曇って時間さえも確かめることができない。

救援トラックが、いたがり呻く男女の負傷者を建物の前に運んで来て、そこに投げ出している。担架に仰向けのまま全身を焼かれている中学生が、不思議に痛がりもせず明瞭に名前を言って眼をあけている。すでにトラックでこと切れているモンペを汚した女——。（いったい何発爆弾をくったのだろうか？）私はどうしてもこのことが確かめなかった。

白いエキホス（バップ剤のひとつ）で顔や首を塗りたくられて、膿汁がべとついた負傷者、女の子だ。眼の前にずり落ちるようになって担架に移された時、焦げてしじれるような臭いがムッと私の鼻を刺した。眼をあげることができない。死んでいるのか、まだ脈があるのか、私はこの深傷の体を見守った。かすかに息はしている、動こうとしない女の子。

——ミズ、水を——

「痛い、痛いけ、この咽につけて下さいよう……」

「いまあげるけ、あッ、こりやわたしの包帯じゃないか、何をあんたアする！」

介抱するわが子の悲鳴に、かたわらの主婦は急に声を荒らだてて、盗み取ろうとする男に抵抗した。そして警防団員とおぼしきこの男の手から、包帯をひったくった。

「何んじやと、何をぬかす、こっちの男の子の怪我ア、わりや見てやれんのか……」

男は逆上して、腕を振り上げて、主婦の袖口を小突きあげた。

「何を言うこともなあ……」

婦人もしぶとくひらき直ろうとしてブツブツと声を落とし、傍らのわが子を介抱した。

男はいまいましそうに、主婦を見返してしばらく何か呟いていた。

私はかいがいしく働く警防団や婦人会員のなかにいて、まったく負傷者に手を貸そうとはしなかった。何かにつかれた者のように拭いきれない不安と恐怖に身をまかせて、この顛末を傍観していた。

——すでに夜にはいった。市街の火焰は依然として衰えようとしなない。目の前に巨人のように横たわる二葉山をへだてて、白島・三篠町のあたりは溶鉱炉さながらに燃えつつける。八キロ遠くの西山手の火焰は己斐のあたりか、山の中腹を焰がなめるように燃えさかっている。近く大芝の川土堤にかけてひとときあがる焰は軍の倉庫に違いない。焰がつつぎと夜の川面に崩れ落ちて、そのまま水をつたって燃えひろがってゆく。

バーン、パッ、シューーン——間断なくはじける異様な破裂音のこだま、四キロ離れた戸坂のこの

位置までぼーっと火の熱気が圧倒してくる。私の脳裡はともすると錯乱して今はただ、あてもなく都心の底の底までも燃えつきていく、真紅の焰を見つめるばかりである。静かに、壮絶にいまは燃えさかっていく。ああ、死にゆくものものこの美しき軍都のいやはてを見よ！

「とても、これじゃはいれはせん」

続々と引きかえしてきた救援隊員はこう言って、ただに燃えさかる夜の街をみつめるのみ。と、
「みよ、美代！」

突如、私のまえの暗がりでは血を曳く女の声がおこった。さっきの女の子のそばだ。私ははうようにして身を近づけてみた。かろうじて一文ローソクの灯がともされている。

「美代ッ、あッどうにか助けてやってください。美代ッ！」

この子の母親が、低く声を殺して、子の両肩をゆさぶる。腫れあがった顔面は、白く粘着剤を塗られて識別さえつきはしない。母親はついに顔をうめるようにわが子に取りついてふるえきっている。
「こがーに焼けてのう！」

「なんとかなりませんかもう！」

そばで看護する婦人らが声をのんだ。女の子を抱きかかえた母親はそのまま消え入るように泣き崩れて、やがて呪うような寂かな嗚咽があたりに流れていった。

——私は危うく全身の痙攣をこらえながら、たまらなく身もだえをした。（こんなことがあっていいのか!!）私はただにわめきたかった。